

博士学位申請論文審査報告要旨

平成 25(2013)年 2

月 13 日

申請者 吉田裕 (LD071016)
論文題目 Colonialism, Gender, and Representation of the Masses: Joseph Conrad, C. L. R. James, Richard Wright, George Lamming, and Ngũgĩ wa Thiong'o
論文審査委員 中井亜佐子、鶴飼哲、齋藤一

1. 本論文の内容と構成

本博士学位請求論文は、文学テキストにおける「群衆」(the crowds)の表象を、近年のポストコロニアル批評、ジェンダー批評の成果を踏まえつつ、植民地支配と脱植民地化の力学との関係から分析したものである。序論で本論文が拠って立つ理論的枠組みが提示された後、本文は作品の発表年代順に、19世紀ヨーロッパの都市と同時期の植民地(第1、2章)、脱植民地化(第3、4、5、6章)、ネオコロニアリズム(第7章)を背景とする群衆表象が議論される。扱うテキストは主として英語で書かれたものであるが、作家の出身地はヨーロッパ、カリブ、アフリカ、アジアと多岐にわたっており、「群衆」をモチーフとする「世界文学」の系譜を構築しようとする野心的な試みである。

本論文の目次は以下のとおり。

Introduction

Chapter 1

Urban Crowds and Colonial Masses in the Mid- and the Late-Nineteenth Century: Poe, Baudelaire, and Conrad

Chapter 2

Crowds, Communities, and Impossible Resistances: Joseph Conrad's *Lord Jim* and *Nostramo*

Chapter 3

History and the Question of Fraternity in the Haitian Revolution: C. L. R. James's *The Black Jacobins*

Chapter 4

Bandung as an Unfinished Project of Decolonisation: Richard Wright's *The Color Curtain*

Chapter 5

Shame, Recognition, and the Psychic Afterlife of Colonialism: George Lamming's *In the Castle of My Skin* and *The Pleasure of Exile*

Chapter 6

Moses and the Archaeology of Resistance: Nation and Motherhood in Ngũgĩ wa Thiong'o's *A Grain of Wheat*

Chapter 7

'Satire or Cannibalism': Ngũgĩ wa Thiong'o's Critique of Neocolonialism in *Devil on the Cross*

2. 本論文の概要

ヨーロッパ近代文学における都市群衆はしばしば、侮蔑の対象となる否定的な存在、場合によっては女性としてジェンダー化される存在である。一方、同時期の植民地文学では、不可視の存在として抑圧されていることも多い。しかし、群衆はそうしたテキストのうちにも、抵抗の可能性を秘めた痕跡を残している。また、20世紀の脱植民地化の文学においては、群衆は植民地解放の原動力となる「連帯」(solidarity)の概念と結び付けられ、積極的な価値付けをされる。本論文は、19世紀から1980年代までの文学テキストにおけるこうした群衆の表象を緻密に分析し、群衆の流動的で不定形、決定不能なあり方を明らかにしている。また、群衆の潜在的な可能性を示唆しつつも、ジェンダー論的観点から群衆内部の差異に注目することによって、安易に連帯や共同性を賛美するある種の批評的傾向に対して批判的な介入を行っている。

序論では、「群衆」という問題設定の意義と本論文の理論的枠組み、方法論が説明されている。本論文は文学テキストを特定の歴史的、社会的背景に即して個別に分析するという方法を取っているが、同時にその問題設定は(たとえば中東革命のような)今日的な状況への関心と無縁ではないことが示される。また、(旧)植民地の社会的基盤の問題を議論の射程に納めつつも、表象の問題にこだわり続けることに関して、ニール・ラザラスの議論に代表される近年のポストコロニアル批評の唯物論的傾向に対して、ガヤトリ・スピヴァクの論考「サバルタンは語るができるか」を根拠にしつつ、批判的な応答を試みている。

第1章では、19世紀ヨーロッパ文学における群衆表象が論じられる。エドガー・アラン・ポーの短編「群衆の人」(1840)、ボードレールの「現代生活の画家」(1863)、ギュスターヴ・ル・ボンの『群衆心理』(1895)といったテキストに描かれる都市の群衆像が近代性の「裏の顔」を表わしており、『闇の奥』(1899)などジョウゼフ・コンラッドの1900年前後の作品における植民地の群衆表象と接続可能であることを論証している。続く第2章では、コンラッドの有名な小説二作、『ロード・ジム』(1900)と『ノストローモ』(1904)が議論される。ここではまず、コンラッドの一人称複数代名詞(we)の「濫用」を分析することによって、「わたしたち」が植民地言説において規範的な集

団性の概念の中に群衆の包摂を目論みつつ失敗する過程を記述する。同時に、コンラッドの群衆表象がル・ボンの群衆にとどまらず、フロイトの群衆心理論を先取りして、指導者への抵抗の契機を秘めた来るべき群衆 (multitude) の可能性を暗示していると論じる。

第3章以降は、いわゆる「脱植民地化の文学」(literatures of decolonization) が議論の対象となり、20世紀の作家たちが集団性をどのように概念化していったか、個別のテキスト・コンテクストに沿って明らかにしている。第3章は、トリニダード出身の思想家C・L・R・ジェイムズがハイチ革命を記述した歴史書『ブラック・ジャコバン』(1938)を、戯曲版「ブラック・ジャコバン」(1967)との比較を通じて論じている。ここではとくに、集団性の理念の一つとして「友愛」(fraternity)のジェンダー化された概念に焦点が当てられている。トゥサン・ルヴェルチュールの理想的／男性的な英雄像と、それと一体化する「大衆」(the masses)とが隠蔽する女性のエージェンシーが、戯曲テキストには書き込まれている点を指摘し、男性中心主義的な「友愛」へのジェイムズのアンビヴァレンスを描き出している。

第4章では、1955年にインドネシアのバンドンで開催されたアジア・アフリカ会議(バンドン会議)について、アメリカ合衆国の黒人作家リチャード・ライトが書いたルポルタージュ『カラー・カーテン』(1956)が取り上げられ、この会議が提唱した「第三世界」という概念が批判的に検証される。ここでは、ライトのテキストの中で新興独立国の人びとの表象が冷戦イデオロギーによって「心理学化」され歪曲されていること、また同時に、宗教や人種に関する一枚岩的な見解が冷戦終結後のイスラムをめぐる表象を予感させるものであることなどが指摘されている。第5章では、バルバドス出身の作家ジョージ・ラミングが論じられ、小説『わが皮膚の砦の中で』(*In the Castle of My Skin*, 1953)とエッセイ集『亡命の歓び』(*The Pleasures of Exile*, 1960)が中心的に取り上げられる。ここではとくに、ラミングにおける恥(shame)と「罪」(guilt)といった情動の問題が、サルトル、マノーニ、フェノンの理論と比較されつつ緻密に議論されている。ラミングが「恥」に注目することによって、「わたしの民衆」というオルタナティブな集団性を理論化していること、同時に、ラミングがこうした新しい集団性の概念が宗主国のジェンダー化されたイメージに拘束されていることに自覚的であること、そこから(旧)被植民者と植民者のあいだの心的相互依存をつきとめていることが指摘されている。

第6章と第7章では、ケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴを中心に、脱植民地化文学における集団性とジェンダーの関係について、より深い考察が行われる。第6章では、マウマウ戦争から独立までを描いたグギの英語小説『一粒の麦』(*A Grain of Wheat*, 1967)が、フロイトの『モーセと一神教』(1938)、ジョモ・ケニヤッタの『ケニヤ山のふもと』(*Facing Mount Kenya* 1938)とともに読解され、メシア言説が脱植民地化と結びつく過程が分析される。フロイトとグギのテキストでは、理想化された固定的な「母性」のイメージが喚起されている点が指摘されるが、グギは一見賛美しているように見える、国家イデオロギーとしての再生産を前提とするジェ

ンダー・セクシュアリティ規範に対して、批判的な側面もあることが示される。第 7 章では、ネオコロニアリズムの時代のケニアを描いたグギのギクユ語小説『十字架にかけられた悪魔』(1980) が取り上げられる。グギの新しい「民衆」小説における韓国の詩人金芝河の影響が指摘され、金芝河の詩のモチーフを取り込みつつ、グギが風刺というレトリックによって知識人と一般民衆の間をつなごうとしたことが、語りの分析等を通じて明らかにされる。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、まず第一に、群衆を都市現象として論じるのではなく、近代の「裏の顔」としての植民地の問題に結び付けることによって、群衆論の視野を大きく拡張した点にある。本論文で扱われるテキストは時代的には 19 世紀から 1980 年代まで、地域的にもヨーロッパからカリブ、アフリカ、アジアと広範囲にわたっているが、そうしたさまざまなテキストを扱いながら、けっして安易な一般化に流れることなく、個別の歴史的、社会的コンテキストを丁寧に調査した上でテキストを緻密に分析し、なおかつたんなる作品論の寄せ集めではない、一つの新しい群衆表象・群衆論の系譜学を構想している点は、非常に高く評価できる。

第二に、ポストコロニアル批評、精神分析、ジェンダー批評、情動理論など最新の批評的成果を下敷きにしつつ、群衆の複雑で矛盾したあり方、その限界と可能性の双方を炙り出した点である。とくに注目すべきは、語りの重層性、人称代名詞の遣い方など、テキストの形式的細部に徹底的にこだわる読解方法である。また、本論文の英語はときに難解で忍耐を要求するものであるが、広い意味で撞着語法的ともいえる修辞を駆使しつつ、決定不能な群衆を記述するための独自の文体を生み出しており、英語学習者の域をはるかに超えた文章力を示している。

第三に評価すべき点としては、取り上げられている作家、作品の多くが日本ではあまり論じられることのないものであり、しかもそうした作家や作品をたんに紹介するだけでなく、コンラッドの小説のような正典的テキストと並べて徹底的な分析していることが挙げられる。C・L・R・ジェイムズの戯曲やリチャード・ライトの『カラー・カーテン』などは、英米でもそれほど読まれることのないテキストである。また、グギに対する金芝河の影響なども、先行研究ではほとんど論じられてこなかったオリジナルな論点である。

しかし、本論文にも、いくつかの点で問題がないわけではない。まず、多数の作家を取り上げているため、個別の作家論としてみた場合には、本来であれば論じるべき作品が取り上げられていない場合がある。たとえばコンラッドにおける群衆表象を論じるのであれば、やはり『ナーシサス号の黒人』や『チャンス』にも触れるべきであろう。また、第 3 章以降では「群衆」というキーワードがあまり使われなくなるため、第 2 章までの議論とのつながりがわかりにくい。本論文に独立した結論がないのも気になる点であり、できれば論文の最後にもう一度群衆論に立ち返って、議論を整理してあげればよかつたろう。

しかしながら、これらの問題点は、けっして本論文が達成した成果の大きさを損なうものではない。以上のことから審査員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であり、当該分野

の研究に十分に寄与したと認め、一橋大学博士(学術)の学位を授与するのが適当である
と考える。

最終試験結果報告

2013年2月13日

受験者 吉田裕 (LD071016)

最終試験委員 中井亜佐子、鶴飼哲、齋藤一

2013年1月14日、学位請求論文提出者、吉田裕氏の論文及び関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文“Colonialism, Gender, and Representation of the Masses: Joseph Conrad, C. L. R. James, Richard Wright, George Lamming, and Ngũgĩ wa Thiong’o”に関する問題点および関連分野についての質疑を行ない、説明を求めたのに対して、吉田裕氏は適切な説明を以って応えた。

よって審査委員一同は、吉田裕氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。